

いような配慮をする必要がある。難聴児はきこえにくいということでコンプレックスをもっていて、配慮や工夫に対して敏感になることも容易に想像できる。難聴児が困るであろうことを予測して配慮や工夫をすることも時には大切であるが、難聴児だから〇〇に困るというのではなく、ひとりの子が〇〇に困っているという見方も大切にする必要があると考えられる。難聴児のきこえの程度、どのような教育を受けてきてどのようなコミュニケーション手段を身につけているのか、そして何より本人が自分の障がいをどのようにとらえ、周囲にどのように理解し受け入れてもらいたいと思っているかを大切に、一人ひとりに合った配慮や工夫をしていく必要がある。また、そのような学校環境への配慮や工夫を通して、難聴児が自信を持ったり、自己肯定感を高めていけるきっかけ作りにも繋げていったりすることが可能だと思われる。

今後、ますます通常学級で生活する難聴児の増加が予想され、その中で難聴児を含むすべての子どもたちにとって過ごしやすい学校環境となるような配慮や工夫が実践されることが求められる。難聴についてよく“耳がきこえない”という表現をされることがあるが、きこえないのは耳ではなく“音”である。バリア(障がい)は音であることを理解して人と物、両方を含んだ意味でのバリアフリーな環境が作られていく必要が増してくる。そして、難聴児について教育という括りだけで考えるのではなく医療や福祉、社会にも目を向けて考え、難聴児を含むすべての子どもたちの可能性を十分に発揮出来るような環境を作っていくように努めることが大切である。

謝辞

本研究を行うにあたり、多くの方にご協力をいただきました。御礼申し上げます。本研究は、茨城大学 教育学部 研究費特別配分の助成を受けて実施しました。

注

- 1) 聴力調整指導小委員会(編著). 2004. 『難聴児童生徒へのきこえの支援 補聴器・人工内耳を使っている児童生徒のために』(財団法人 日本学校保健会).
- 2) 山田弘幸(編著). 2009. 『言語聴覚療法シリーズ 5 改訂 聴覚障害 I-基礎編』(建帛社).
- 3) 宇佐美真一(編著). 2006. 『きこえと遺伝子』(金原出版).
- 4) 岩田吉生. 2009. 「通常の小学校に在籍する難聴児の保護者の教育支援に関するニーズ調査 - 保護者に対する質問紙調査を通して - 」『愛知教育大学研究報告』58, 21-27.
- 5) 桑原隆俊(著), 灰崎武弘(監修). 2005. 『障害を知ろう! みんなちがって みんないい 5 耳の不自由な友だち』(金の星社).

